

図書館通信 — 74 —

1985. 12

図書館今昔そして将来

附属図書館閲覧課長 徳永博陸

私自身がみてきた40年程前からの図書館の変遷を、三つの視点から述べてみたいと思います。

第一は図書の利用形態です。現在至極一般的な開架閲覧方式は、昭和30年代から普及し始めたことです。入館者が直接図書に触れ、運用面も出納の手間が一部省けるまことに合理的な方法です。ただ、資料散逸の危険度はとも角、図書カードによる検索の必要性がうすれたことは、必ずしも長所とばかりは言えないように思います。系統的に文献にアクセスする習慣を中学・高校時代から身につけることは、学習者、研究者の基本的姿勢につながる筈だからです。コピーした原典の著者・書名のメモがなく困った学生がいた由、図書館が便利になることへ、一抹の疑問を投げかけます。

図書館の側から言えば、仮に全面開架図書館であろうとも、管理の面もあり、目録記入及び検索システムの作成は不可欠です。まして大学図書館の場合は、館内収蔵分だけでなく研究室等備付図書も守備範囲となります。目録による各資料的確な書誌紹介、特定主題文献への能率的アクセス等、図書館司書の基本的任務は昔も今も変わりありません。端的に言えば、所管資料と利用者とのよき仲介者たることが司書の使命であり、研究図書館であれば、さらに研究者のよき協力者であることが望まれます。

ところで情報提供の意味では、司書の守備範囲は当該館にとどまってはならない筈です。館蔵図書目録の交換等により、従前ごく一部の大学グループ図書館間でのみ行われていた他館の利用が、学術の進展に伴い、現在は館界全体の指向となってそのためのシステム化が始まっております。図書館相互利用の活発化、これが第二の視点です。

現在既に「国立大学図書館間共通閲覧証」の交付、「国立大学等図書館間文献複写業務」制度の実施があり、図書館相互であれば図書の現品貸借すら一部可能となっていることは、研究者にとっても図書館にとってもまことに心強いことです。今

図書館は、従前の自己完結型……点から線、いや三次元的とさえ言える程の、高度な図書館活動の時代に入ろうとしております。

そしてそれを可能にしようとするのは、現在も目覚ましい発展を遂げつつある電子情報処理・伝達技術です。第三の視点は、図書館業務へのコンピューターないしはハイテクノロジーの強力な応用、これなくして図書館相互の緊密な情報交換、或いは膨大な総合図書目録の編成はあり得ません。

思えば、従来私ども司書が研修した図書整理技術は、人間の能力、判断力の範囲でいかに効率よく、大量の情報群から特定情報を抽出するかを目的に開発されたメソッドです。カードによって個々の情報を、万人周知の或る秩序(50音順など)に予め整理させて置くことが必要だったのに対し、コンピューターは、無秩序にインプットした情報群から、必要の都度いとも簡単に、コマンドする秩序どおりに情報を整理させ、ディスプレイ等にアウトプットしてくれます。本館で現用のオンライン文献検索でみられるような、文節中のキーワードを検索するなど手作りカード時代は思いもよらぬことで、まして図書カード皆無の図書館など、夢想だにできなかったことです。

そしてこのような可能性を踏まえ、さらに全大
学図書館をネットワークに組むことを目的に、現

もくじ

図書館今昔そして将来……………	1
国立大学図書館間共通閲覧証……………	2
附属図書館浜松分館の紹介……………	3
工業短期大学部図書室の紹介……………	3
〈私のすすめたい本〉	
英和辞典について……………	4
『「非まじめ」のすすめ』『超常識』……………	5
〈参考図書の紹介と使い方〉	
国語辞典と「お熱い仲」に……………	6
教職員著作寄贈図書……………	8

在「学術情報センターシステム」構想が進められていることは周知のとおりです。このシステムは同時に、個々の館が従来別々に行ってきた目録記入作業を共同化、統一化することにもつながっており、図書館人としてもその早期実現を期待することは勿論ですが、情報源としてこのシステムが円滑に稼働するためには、個々の図書館も、所管資料の情報提供、情報処理技術の標準化等、新たな任務遂行の局面があることに大きな責務を感じざるを得ません。

諸手続の電算処理も可能となるため、利用者の側からみた図書館はさらに便利で親しめるものとなります。新設図書館でない限り全蔵書一斉に行うのは無理としても、早晚、図書貸出等がIDカード使用により帳票不要の時代が来る筈です。

図書館間文献複写は、現時点では国立相互の料金精算事務が電算化されているだけで、帳票関連事務からの解放、館種を上げたファクシミリ網によるコピーの早期入手等がさらに望まれます。

また、無限に増加する図書の収蔵について、図書館の書庫増築には自ら限界があります。この現実を回避し、併せて長期利用に耐える資料とするため、将来一部の図書を、ニューメディア……何等かの高密度新記憶媒体に置換える必要も考えられます。たとえば、光ディスク記録技術をこのために利用すれば、12 cm 盤に「広辞苑」20冊分の情報が蓄積でき、所要箇所の検索、複写電送等に至便であることが、既に実用化で明らかです。

こうした諸種の新技术を併用しながら、図書館のサービスが一層高度で濃密なものとなり、利用者も気軽なキータッチ検索が可能となる時、冒頭に述べた“便利になることへの疑問”も一挙に解消するのではないかと思います。

ネットワーク形成によって、図書館の理想的運営がみられるまでには、過渡期の変則的状態の困難は避けられないことですが、利用の学生・教官各位、個々の図書館人の積極的対応を得て、図書館の将来を築きたいものだと思っております。

国立大学図書館間共通閲覧証

本学の教職員・大学院生が、よその国立大学の図書館へ行って、その資料を見たいという場合、当館から国立大学図書館間共通閲覧証（以下、共通閲覧証と略）というものを発行いたします。これを持っていけば、特に相手館に支障のない限り、その図書・雑誌等を見ることができます。

この共通閲覧証は、当館の参考調査係が発行の窓口となっております。本人に直接記入していただいておりますので、この係までお越し下さい。

使える期間はその年度限りです。例えば3月31日発行のものは、その日しか使えません。翌4月1日からは、また新しい共通閲覧証が必要となります。

なお、公私立大学の図書館利用の際には、相手館宛に紹介状というものを発行します。学部学生による他大学の利用につきましても同様です。窓口はやはり参考調査係です。併せて御利用下さい。

■ 利用状況

(昭和57年1月15日施行以来昨年度まで)

(単位：人)

所属	年度	昭和56年度	昭和57年度	昭和58年度	昭和59年度	計
教職員	人	1	7	10	6	24
	教	3	5	5	4	17
	理	1	2	2	1	6
	農	1	1	1	0	3
	養	2	2	7	5	16
	法	2	1	0	0	3
大学院生	他	0	1	0	0	1
	教	0	4	11	15	30
	理	0	0	2	2	4
	農	0	0	2	0	2
計		10	23	40	33	106

*国立大学図書館相互の利用促進と円滑化を目的として昭和57年1月に発足したこの国立大学図書館間共通閲覧証の制度も、来月で早や4年目を迎えることになりました。学内の皆様のより積極的、有効な御利用と、併せて本学図書館並びに資料のより広い公開へ向けての一層の御協力とをお願いしたいと思います。

お知らせ (本館)

◎冬季休業中の長期貸出

貸出冊数：5冊以内

貸出開始：12月12日(木)から

返却期限：昭和61年1月16日(木)

まで

◎休館 (臨時も含む)

昭和60年12月20日(金)～

昭和61年1月4日(土)

昭和61年1月25日(土)

(共通一次試験のため)

◎開館時間の変更

昭和61年1月6日(月)～

1月10日(金)

月～金：午前8時30分～午後5時

土：午前8時30分～12時

附属図書館浜松分館の紹介

昭和 58 年 4 月、研究図書館としての機能を確立すべく増築し、はや 2 年、雑誌の集中化によってより多くの利用者を迎える図書館となった。ここで、再度分館の紹介をさせていただく。

フロアは 2 層からなり、主に 1 階は学習図書館として、2 階は研究図書館として活用している。

では正面玄関より、順を追って紹介していこう。玄関をはいると右手に新聞コーナーがみえる。ここには 9 種類の日刊紙を中心に、科学新聞、読書新聞等がとじられている。その奥がロッカーコーナー、必要以外のカバン類はここに入れて入館する。

カウンターの前面が目録コーナーである。書名、著者名、閲覧の各カード目録が並んでいる。その隣りが大型美術書と一般雑誌のコーナーである。目を中庭の方へ移してほしい。参考図書の下書架がみえる。ここには語学関係の辞書、百科事典をはじめ学習用のハンドブック等も排架してある。

新設部に進もう。中央に開架図書の書架がある。東側奥からまず指定図書、つづいて日本十進分類法に従い学生用の図書が排架してある。座席は東側、南側に約 65 席、その他西側奥にはグループ学習ができるよう間仕切りをした席が設けられている。この学習室は自由に使用できる。

次に 2 階へ行こう。この階段下には時間外専用入口があるが、時間外利用については後述する。

2 階にあがると、正面に新着和雑誌、左手に新着洋雑誌が排架してある。この新着雑誌は最新号が雑誌架前面に、当年のものは雑誌架内に納めら

れており、年が変わるとまとめてバックナンバーの書架へ移される。新着雑誌架の奥いっばいに並んでいるのが洋雑誌のバックナンバーである。既設部へ進もう。ここには和雑誌のバックナンバー、大学の紀要、二次資料等がおいてある。二次資料以外は全てアルファベット順であるが、さがしている雑誌に早くたどりつきたい時には、中央カウンター上のバックナンバー排架一覧を利用すると便利である。またこの中央新設既設接点部分にはコピー室がある。現在ゼロックスとマイクロリーダーが 1 台ずつおいてある。既設部 2 階閲覧室を出て階段を下がるとカウンター前に戻る。

ざっと一回りしたが、この他に 2 階既設階段横に視聴覚室、1 階カウンター横に情報検索室、事務室奥に積層 3 階の書庫がある。視聴覚室、情報検索室の利用についてはカウンターに問い合わせさせていただきたい。ちなみに情報検索については、現在は、日本科学技術情報センターの JOIS と米国ダイアログ社の DIALOG の 2 つのシステムのオンライン検索が利用可能である。

最後になったが、時間外の利用についてふれておく。職員のうち、学術研究の必要上、時間外の利用を希望する場合は、あらかじめ個人別の ID カードの発行を受ければ利用することができる。発行方法については、分館事務室に問い合わせさせていただきたい。

以上簡単に分館の紹介をさせていただいたが、サービス内容、利用方法等詳しくはカウンターにおたずねいただきたい。

工業短期大学部図書室の紹介

本短期大学部は、工業勤労学徒のための夜間高等教育機関として静岡大学工学部構内に設けられた併設短大である。現在の建物は、鉄筋コンクリート造の 5 階建てで、昭和 53 年 3 月に竣工したものであり、図書室もこの中にある。

図書室の規模は、床面積延 135 m²、閲覧スペース 80 m²、書庫 55 m²であり、総閲覧座席数は 46 席ある。現在図書室で保有する蔵書数は、和書 11,000 冊と洋書 770 冊の計 11,770 冊があり、この他雑誌は約 30 種類、新聞 5 種類を保有している。図書室を利用できる時間は、休業日を除き、平日が午前 9 時から午後 8 時 55 分と、土曜日は午前 9 時から正

午まで及び午後 5 時から午後 8 時 55 分までであるが、学生からの要望により、今年の 7 月からは試験的に週 3 回（月、水、金）について午後 9 時 30 分まで時間延長を実施している。貸出しは 7 日以内とし、図書借用証により 3 冊までを認めている。

図書室利用対象者としては、昭和 60 年 4 月現在、本短期大学部学生 654 名と教職員 52 名があり、4 月から 10 月上旬までの貸出冊数は、学生が 365 冊、教職員が 61 冊という利用状況であった。

以上、工業短期大学部図書室について簡単に紹介したが、今後学生諸君のますますの利用を願うものである。

〈私のすすめたい本・53〉

英和辞典について

林 きとる 観

2年間の教養課程を終えて専門課程に進学すると外国語、特に英語の文献を読む機会が多くなってきて、どのような英和辞典を使ったらよいかがか切実な問題となるが、使い勝手の良い辞書を選ぶことはそう簡単なことではなく、ある程度の経験が必要となる。ささやかな経験をお話しして参考にさせていただければ幸である。

自然科学書や技術論文にはよく出てくるが、旧版の英和辞典には余り出てこない単語に“sinusoidal”というのがある。*最新コンサイス英和辞典(1965)、*岩波英和辞典(1958)、*研究社新英和大辞典(1965)などを見ていただければよい。*Webster's New World Dictionary(1970)にsinusoid: same as sine curve, sinusoidal adj.と出ている通り、これは「正弦状の」と訳すのであるが、学生が英論文を読むときこのような大部な辞書を使うわけもなく、この単語の意味を計りかねて四苦八苦するようである。このように科学・技術関係の文献によく出てくる単語はかならず辞書に入れてほしいものとかねがね思っていたが、新改定版や新版の英和辞典(例えば、*新コンサイス英和辞典(1975)、*リーダーズ英和辞典(1984)等)にはその辺の配慮をしたものが多くなっているのは喜ばしい。

もう一つの例は、“hydraulic”という単語である。旧版の辞書は勿論、比較的新しいものでも「水力の、水圧の、水力学の」としか出ていない。この単語には他に「油圧の」という意味があるのだが、これを入れている英和辞典はほとんどない。この事実は次のような経緯によって初めて知った。しばらく前に見た大型旅客機の事故を扱った映画の中で操縦不能に陥った機の乗務員が、「水圧システムがやられて制御できない」と言うのである。航空機の操縦システムは通常油圧で制御されているので「水圧」は明らかに誤訳であるが、辞書を数種類調べてみたところどの辞書も「油圧」にはふれていなかった。これでは門外漢が「水圧」とするのも無理はない。

同種の例に“analysis”、“response”がある。学生は、まず例外なくこれを「分析」、「反応」と翻訳するが、私の専門の制御工学では、ほとんどの場合「解析」、「応答」でなければならない。不審

に思って調べたところ、やはり「分解、分析、解剖」、「返答、感応、答唱、神の答え」としか出ていない辞書があった。

どの辞書も改訂版、新版ではこれら不備な点をかなり改め、さらに積極的に新しい科学・技術用語を取り入れようとする姿勢も窺えて結構なことであるが、次に紹介するようなことではかえって逆効果となる。

フルイディクス(fluidics)という比較的新しい技術がある。勿論、fluidicsという術語も新造語である。しかし代表的な英和辞典がほとんどこの術語を採録している積極さには驚かされたが、その訳語、説明にはひどいものが多い。fluidicsはISO(International Standardization Organization)の定義によれば“signal sensing and information processing or energy control with fluid using components without moving parts”となっているが、我が英和辞典では「応用流体力学」*三省堂新コンサイス英和辞典(1980)、「流体工学」*(旺文社エッセンシャル英和辞典(1974))、「流体研究(主として電流を用いておこなう)」*(三省堂カレッジクラウン英和辞典(1977))、「フルイディクス、流体素子工学(流体の流れを使ったスイッチ素子でパワー増幅能力を持ち、自動制御系の要素として使われる)」*(研究社新英和大辞典(1980))などとなっており、比較的正確なのは四番目だけで、他は全部間違っている。特に三番目は出鱈目である。こんな間違いを犯す位ならむしろ辞書には入れないほうがましだ。

このような点を考慮したうえで科学・技術英文を読むのに比較的適した英和辞典をひとつ挙げるとすれば、昨年研究社から出された*「リーダーズ英和辞典」である。この辞書は上述の諸点に関して余り破綻がなく、しかも耳慣れない術語には簡単な説明も出ていて便利である。しかし、小型英和辞典の宿命として英単語と日本語の単語との対応関係を与えるのが基本で、内容説明はかならずしも十分でないから、文献をよりよく理解するにはDictionary of Scientific and Technical Terms(McGraw-Hill)のような事典的性格を持った辞書の併用が望ましい。

※次頁下欄へつづく

〈私のすすめたい本・53〉

森 政弘 著

「非まじめ」のすすめ——ゴミを砂金にする発想——

講談社

「超常識」——平凡のなかの非凡のすすめ——

ダイヤモンド社

影山 静夫

携帯用の小さなホッチキスが売り出された時、便利だったので一つ求めた。色々といねくり廻していたら、本来ならば紙を綴じるための道具が、何とした事か、左手の人指し指に細い針がチクリ。よく見ると綴じる時は先が曲る筈なのに、相手が指だと真直ぐのままであった。そこで、ベニヤ板にやって見ると、自分の指の様に痛くないので、見事にプスリ。画紙の役目を見事やってのけていたのではないか。それ以後、比の使い方を教えてあげて皆さんに喜んでいただいた事がある。

森先生は、名古屋大学の医学部に入学されて、途中で工学部の電気工学科に変った方だけに、医学部時代にやった解剖のせいか、医学的センスも持っていて、動物の動きのしくみなどにくわしい様に見うけられる。また、海禅寺の後藤栄山禅師に参禅していた事もあって、物の見方のユニークな方でもある。以上の様な背景のおかげか、創造的オートメーション、生物工学、化学工場のオートメーション、人工内臓の自動制御、人工の手、メカノケミカル系の研究など数多く、現在はロボット工学の世界的権威で、テレビなどでよく温顔を拝見していると思う。比の間の筑波科学万博の「芙蓉館」のロボットも、先生の御指導によったものと聞いている。正に、ユニークな和魂洋才の人物と言っても過言ではなからう。

両方の本を読んで見ると、同一著者だけに一部重複している所もあるが、共鳴する点が非常に多い。

ロボット博士の第三の発想・奇想天外！ 一読三嘆！ まじめ、不まじめを超えた第三の発想！の「非まじめ」のすすめの方から読むと……

考えることを止めよ——今の日本人は「前頭葉枚置型・後頭葉酷使型」になっている。後頭葉を休ませ前頭葉を眠りから覚させよ。

ピンチに際してこそ非まじめに——大地震が来たら必ず水を一杯飲むという態度こそ大切なのだ。ピンチはピンチに非ず。ゴミはゴミに非ず。

知識を得ようと思うな——興味しんしんとなったときも決してそこから知識を得ようと思うな。

外から知識を得るのでなく、新しいものを自分の内部から湧き出させよ。

レコード盤にゴミがついたら、ゴミを拒否せずしげしげと眺める。するとゴミは模様となっている事に気づく。その現象は静電気が絶縁物の薄いシートについて、そこに粉がおびき寄せられたものである。これはコピーに使えないか。

つまり字とか模様のところに電気をおびさせ、そこへプラスチックの特製の粉を振りかけて焼きつければ、それがゼロックスである。

ゴミを拒否しない——こういう姿勢を持った人がどんなものでもうまく使う。人生の達人であると同時に、大発明のできる人でもある。ゴミを拒否することは、コピーもまた拒否することである。……

と東工大教授森政弘先生はおっしゃっている。創造性が強く要望されている現代、是非一読することをおすすめする。

〈工業短期大学部・化学工学〉

※前頁より

以上、述べてきた通り科学・技術英文の読解に優れた英和辞典は欠かせないが、これがあれば十分と言うわけにはいかない。あたりまえの事をあたりまえと理解する常識、文脈の論理的整合性に対する鋭い感覚や判断力、なににも増して専門の学力が必要不可欠である。専門知識不足のため極く簡単な英文が全然理解できず、それを単語に関する知識不足と勘違いして辞書を調べまくる学生があまりにも多い。専門知識の修得に励まれるよう切望する次第である。

〈工学部・エネルギー機械工学〉

(*印は本館所蔵を示す。)

〈参考図書で紹介と使い方・④〉

国語辞典と「お熱い仲」に

久島 茂

この夏ジャンボ旅客機が遭難した時、日本航空へつめかけた乗客の家族をつかまえて、ある記者がこう聞いた。「何か、ご感想を……」これをテレビで見ていた私は暴力場面を目撃したようなショックを受けた。「感想」という何でもない言葉がこれほど残酷に響くとは……。私は手近の国語辞典を引いてみた。

「ある物事に対して心に生じた、まとまりのある感じや考え」

* (岩波国語辞典第3版、岩波書店)

「ある事柄について感じた事 (が、発表出来る程度にまとまったもの)」

* (新明解国語辞典第3版、三省堂)

「感想」とは単なる感じや考えなのではなく、「まとまり」をもっている必要があるのだ。(この点「気持ち」の意味と大きく異なる。) 混乱し動揺している人を相手に「まとまった考え」を要求することがおかしいわけだ。「感想」を求める以上、相手が十分余裕を持っていると見なしたわけで、その事が相手の感情をまるっきり無視した事になるのだろう。「国語辞典」のおかげで以上のことが分かった。(注1)

「国語辞典」は言葉がもっているもっと多彩な働きも我々に教えてくれる。今の「ご感想」に使われていた「ご」とか「お」という言葉も「これはごあいさつだね」となると「あきれた」感じになってしまうし(新明解国語)、「お寒い」が「設備だ」に続く「貧弱」の意味だ(岩波国語)。一方「お熱い」と言えば「からかった」ことになり、「お決まり」では「マンネリ」の感じが出てくる*(例解新国語辞典、三省堂)。「おはこの外にも、「お握り、お萩、お負け、お開き、お手付き、お袋」のように使われていて、こうなると「お」のあるなしで意味がガラリと変わってしまう。

もう少し言葉の不思議さや非論理性を感じさせるものを、「例解新国語」の説明の中から拾ってみよう。「車窓」という言葉は「乗り物の窓」と考えれば済みそうだが、実は「車窓をそうじする」と言うわけにはいかない。これは中から外を眺める時に「車窓のけしき」のように使う。こういう時のために用意された言葉だ。これとよく似ているのが「戸板」だ。これも「病人などを運ぶ」とい

う使い途がない限り出番が回ってこない。ただ立っているだけの時は「雨戸」なのだから。「半生」というと「一生の半分」で問題はなさそうだが、実はその中に「大事な時期」という意味がはいっているために、60歳の方が「わが半生を語る」と言った時、社会に出てから60歳まで、実際には一生に近いものが語られることになる。「上、中、下」は組をなしているから、「上流階級」と一つが言える以上、「中、下」についても同じようになるかという、「下」だけは「下流階級」と言いにくい。普通「下層階級」である。季節の入り口を例えば「春先」と言ったからといって、「夏先、秋先、冬先」は無理である。「秋」についてはまた別の「秋口」という言葉が用意してある。春と秋についてこういう言い方があるのは、我々がこの中間の季節を大事に思っているからに違いない。

「国語辞典」を開きさえすれば、このように個性的な言葉があちこちから声をかけてくれる。大学生の皆さんにお願いする。4年間の内の2週間でいいから、小型辞典のためにさいてもらえないだろうか。「ああ」から「んん」まで1冊と付き合ってほしい。……「ああ」も「んん」も共に「承知した」を表わす声なのだが。

先日、外国語専門の恩師から電話があって、「三重県の古市という所は一体どんな所だろうか」といきなり質問された。この土地の文化的な背景を知りたいらしい。私はすぐに「日本国語大辞典」(小学館)を引いてみた。「三重県伊勢市の地名。江戸時代は伊勢神宮の外宮から内宮に至る間の山の旧道沿いの集落で、二見・朝熊^{あさくま}方面に至る道との分岐点にもあたり、旅館^{りやういん}や妓楼^{きゆう}が軒を並べていた。(「好色一代女」の用例が続く。)

私は辞典をそのまま読んだだけで、恩師から大いに感謝された。私の方は改めて大辞典に感謝した。大型の国語辞典はこうした「百科語彙」も含めて、古語・現代語ともに豊富である。大型辞典の内をよく利用されていると思われる*「日本国語大辞典」について、ここで簡単に述べておこう。

全20巻。昭和51年完結。収録語数約50万。古語と現代語を兼ねた辞典というと、従来、中古・中世に用例が集中し、近世以後は「お負け」程度

ということが多かった。古語辞典は中古及び中世の言葉が中心であり、現代語辞典は現代語が対象となるから、両者を単純に合わせると近世・近代が地盤沈下を起こすことになる。ところがこの時代の言葉こそ、現代語に直結するものであり、現代語の知識を深めるためにゆるがせにできないものである。この時代の用例を飛躍的に増した点は、この辞典の誇るべきところである。これによって、言葉の歴史をたどることが容易になった。例えば、「おとうさん」「おかあさん」は明治末期に教科書に使うために人工的に作った言葉と言われていた（注2）が、実は「おかあさん」の方は既に「江戸末期上方では中流以上の男女児の用語」として使われていたことが分かる。次の資料が更に示されている。

「京坂ともに男女児より父を称して中以上は御爺様母を呼んで御かあさんと云、小民の子は『ととさん』『かかさん』と云」（随筆・守貞漫稿）
また辞典としては珍しく「補注」の欄が作られていて、意味の変遷などが詳しく説かれているのは貴重である。例えば、話し相手を指すのに使う「お前」について次のようにある。

「対称の例は、江戸前期までは、敬意の強い語として上位者に対して用いられたが、明和・安永（1764～81）頃には上位もしくは対等者に、さらに文化・文政（1804～30）頃になると、同等もしくは下位者に対して用いられるようになり今日に至った。ただし方言としては、今も上位もしくは対等者を呼ぶところが点在する。」

そうすると、「お前百までわしゃ九十九まで」という俗語は妻から夫に対して言っているわけだから、これが作られたのは少なくとも文化・文政より前だろうと見当がつけられる。

更に、現代語辞典にも示されることの稀だったアクセントが、主要語彙について平安・鎌倉・江戸ときわめて広い時代にわたって記されたのは画期的なことだった。（注3）語源説が多数取り上げられたのもまた新しい試みである。今、このアクセント資料を使って、ここに上げられた語源説を検討してみよう。例えば「嵐」という語を見ると6種の語源説が示されているが、その内5種までが「荒し」と関係ありとしている（つまり意味は「荒い嵐」と考える）。そこで平安時代のアクセントはと見ると「嵐」は「低低低」であり、「荒し」は「高高低降」である。実は今までの研究によって、単語が派生関係にある場合は語頭の「高」「低」が一致する必要があるのだが、「荒し」語源説はこの原則に反している。ここで別に、「嵐」という語の平安時代のアクセントを調べてみると、「低低低」

と分かる。（注4）これは「嵐」と全く同じである。しかも「嵐」の「語釈」欄には「特に山風や山おろしのことが多い。」と記してある。古く「万葉集」で「嵐」を「下風、山下、降下」とも表記していることを考え合わせれば、「嵐」と兄弟関係にあるのは「荒し」でなく「嵐」の方だと分かってくる。ところがこの説は6種の語源説のどれとも一致しない。要するに、これらの語源説は現代の研究によって洗い直されたものでなく、従来の説の単なる紹介にすぎない。うっかりすると確かな説と思いきや恐ろしい恐れがあるので、特に注意が必要である。

……以前、女子大生が高校野球の話をしていて、「コンダラ」が大変だ、「コンダラ」で鍛えられるとしきりに言っていたことがあった。これがどういう意味なのか「日本国語大辞典」を引いてみたが見当たらない。そこで収録語彙70万に近い「大辞典」（平凡社。全26巻。昭和11年完結）に当たってみると、方言として「この人達」「これなら」の意味が載っていた。しかしこれは別の言葉である。仕方なく本人にどういう意味なのか尋ねると、「『巨人の星』の歌に『重いコンダラ試練の道を行くが男のド根性』とあるでしょう。足腰を鍛えるためにこれを引っぱりながら走るんです。綱の先に車のタイヤのようなものが付いてますが、アレのことです。」とのことであつた。（注5）これではどんな大型の辞典でも無理だった。しかしこれをひと事として笑ってばかりはいられない。どんな所から言葉は変わっていくかわからない。我々の先輩だって、漢字の「秘」、和語の「だらしない」、外来語の「デッドロックに乗り上げる」など、誤って使ってしまった。そのままの形を我々も受け継いで使っているのだから。（注6）言葉はどんどん動いている。それを国語辞典は必死になって追いかけているのである。〈教育学部・国語学〉

（注1）言葉の意味の問題の外に、深刻な場面で何か質問すること自体が礼を失している、ということもある。

（注2）岩淵悦太郎著「日本語を考える」にもこの説が見える。

（注3）この外に現代語に標準アクセントが、日常使用される現代語に京都アクセントが付けられている。

（注4）「下ろす」のアクセント「低低下降」を基にして、連用形名詞「下ろし」のアクセントを「低低低」と推定できる。

（注5）歌の意味は自分で考えていただきたい。

（注6）「秘」の「禾」（ノギヘン）は「ネ」（シメスヘン）を誤ったもの、「だらし」は「しだら」の転倒、「デッドロック」はdeadlockのlock（錠）をrock（岩）と誤解したもの。

■教職員著作寄贈図書

＜浜松分館＞

片桐孝夫 (工学部)

『有機化学の基礎』〈共著〉朝倉書店
⇒ 437.01/404

宇野正美 (工学部)

『臨床検査技術師国家試験のための医用電子工
学概論』コロナ社⇒ 492.8/33

三浦五郎 (工学部)

『電気電子機器工学』朝倉書店⇒ 542.1/120

＜本館＞

上田伝明 (教養部)

『日本国憲法講義』法律文化社⇒ 323.4 / U 32
(開架)

山下秀智 (教養部)

『教行信証の世界 下』北樹出版
⇒ 188.71/Sh 69 Y / 3

武 恒子 (教育学部)

『食と調理学』〈共著〉弘学出版⇒ 596.4/Ta 58

吉原崇恵 (教育学部)

『家庭科の授業研究』〈共著〉学術図書出版社
⇒ 375.5/Ki 24

岡本光司 (教育学部)

『中学校若い教師のための数学科授業相談』〈編
集〉明治図書出版⇒ 375.4/O 42

小和田哲男 (教育学部)

『駿河今川一族』新人物往来社⇒ 288.1/O 93

『後北条氏研究』吉川弘文館⇒ 210.47/O 93

『戦国武将』中央公論社⇒ S 210.47/O 93

『戦国武将の生き方死に方』新人物往来社

⇒ 210.47/O 93

『戦国合戦事典』〈編著〉三省堂⇒ 210.47/O 93

『歴史の群像 5 : 下剋上』〈共著〉集英社

⇒ 281.08/R 25/5

『静岡県古城めぐり』〈共著〉静岡新聞社

⇒ 215.4/O 93

『駿河の今川氏 第8集』今川氏研究会編〈執筆〉

静岡谷島屋⇒ 215.4/Su 76/8

村井 宏 (農学部)

『治山緑化工』農林出版⇒ S 656.5/Mu 41

池田隆正 (教育学部)

『本質への道—ニヒリズム克服の根本問題—』
ナカニシヤ出版⇒ 104/I 32

八木達彦 (教育学部)

『生物生産の場における生理的・化学的制御』
研究成果報告書編集委員会編〈執筆〉
⇒ 615/Se 17 (開架)

草間慶一 (理学部)

『日本産カミキリ大図鑑』日本鞘翅目学会編〈執筆〉
講談社⇒ 486.6/N 77

土 隆一 (理学部)

『三島市小浜池保存調査に関する報告書』三島
市小浜池保存調査委員会議〈代表〉
⇒ 452.95/Mi 53

農学部

『食糧経済の基本問題』〈多門院和夫、木宮健二
ほか執筆〉農林統計協会⇒ 611.3/Ki 54

教育学部地学教室

『地質構造の科学』〈狩野謙一、木宮一邦、増田
俊明ほか執筆〉朝倉書店⇒ 455.8/Ki 39

豊川卓爾先生退官記念事業会

『静大法経史おぼえがき』豊川卓爾著
⇒ 377.21/Sh 94 T

細井淳志郎 (前・教育学部教授)

『地域をめぐる自然と人間との接点』細井淳志
郎先生退官記念論文集出版事業会編⇒ 290.4/
H 94

故増井正夫教授追悼事業会

『増井正夫教授研究業績集録』⇒ 620.4/Ma 67

高木吉武 (名誉教授)

『はぐれ鳥 ずいひつ集』高木滋生建築設計事
務所⇒ 049.1/Ta 29

『縁台ばなし ずいひつ集』同上⇒ 049.1/Ta 29

岡田英雄 (名誉教授)

『近代作家の表現研究』双文社⇒ 910.26/O 38

春山俊夫 (附属図書館)

『静岡県自由民権資料集』静岡県民権百年実行
委員会編〈編集〉三一書房⇒ 312.1/Sh 94

『ドキュメント静岡県の民権』同上編〈執筆〉

三一書房⇒ 312.1/Sh 94